

無名草子

文

この世に、いかでかかることありけむと、めでたくおぼゆることは、文こそ侍れな。『枕草子』に、返す返す申して侍るめれば、こと新しく申すに及ばねど、なほいとめでたきものなり。遙かなる世界にかき離れて、幾年あひ見ぬ人なれど、文といふものだに見つれば、ただ今差し向かひたる心地して、なかなか、うち向かひては思ふほども続けやらぬ心の色をも表し、言はまほしきことをこまごまと書き尽くしたるを見る心地は、めづらしく、うれしく、あひ向かひたるに劣りてやはある。

つれづれなる折、昔の人の文見出でたるは、ただその折の心地して、いみじくうれしくこそおぼゆれ。まして、亡き人などの書きたるものなど見るは、いみじくあはれに、年月の多く積もりたるも、ただ今筆うち濡らして書きたるやうなるこそ、かへすがへすめでたけれ。なにごとも、ただ差し向かひたるほどの情けばかりにてこそ侍るに、これは、ただ昔ながら、つゆ変はることなきも、いとめでたきことなり。

いみじかりける延喜・天暦の御時の古事も、唐土・天竺の知らぬ世のことも、この文字といふものなからましかば、今の世のわれらが片端も、いかでか書き伝へましなど思ふにも、なほ、かばかりめでたきことはよも侍らじ。